



高大接続改革の現状と これからの高校教育の展望

I 入試改革の振り返り

入試改革・高大接続改革の意味は何だったのか？

大学入試改革のこれまでの経緯：実現したもの、しなかったもの

西暦 和暦	2017 H29	2018 H30	2019 H31/R1	2020 R2	2021 R3	2022 R4	2023 R5	2024 R6	2025 R7	2026 R8
大学入学共通テスト	実施方針の公表・試行テスト（5万人）	試行テスト（10万人）	実施大綱の公表	2021年度（R3年度入学者選抜）入試よりスタート（ 現行課程、国語、数学I、数学I・数学Aで80～120字短文記述各3問程度、国語約20分、数学10分延長 ）正解が1つではない設問新設、成績送付1週間後に延長				2025年度入試より次期新課程入試（地理歴史・公民分野、理科分野での記述式導入検討）R7より国・数が10分延長		
高校生のための学びの基礎診断	実施方針の公表 プレテスト実施	テスト・検定の認定制度	2019年高2生よりスタート（試行期間）民間から選択可能なテスト・検定が開発・提供され、利活用が促進される（国・数・英 英語は4技能が前提 ）				本番スタート（次期新課程高2生） 入試での利用が可能に？			
英語4技能テスト	共通テストと民間試験併用案で確定。大学入試英語成績提供システム参加試験決定			国立大は共通テストでの英語2技能と、大学入試センターで認定される外部検定の両方を使用。2020年度4～12月の検定2回までの結果をセンターから大学に送付				完全民間検定利用スタート（予定）		
R3～入試選抜実施要項の見直し		H33(R3)年度入試告知		新要項でのR3年度入試開始（R2年9月～） AO→総合型選抜（＊以下名称変更は仮称。9月～合格発表11月以降、「学力に過度に重点を置かない」を削除、定員制限なしに） 推薦→学校推薦型選抜（11月～合格12月以降、「学力不問」を削除、定員制限50%） 一般入試→一般選抜（1月25日～合格発表3月31日まで、調査書等の活用による学力の3要素の評価、高度の思考力を見る論述の個別試験への導入） 調査書の変更（ 指導上の参考となる諸事項の拡充・詳細化、評定平均値→学習成績の状況 ）、推薦書、活動報告書などの拡充、電子調査書化の検討						
国大協	2020までに 入学定員の30%を多面的・総合的な入試に 。R3年度入試で、「思考力・判断力・表現力」を見る問題を2次でどのように課すのかなどを検討。→H30年度末までに告知									
次期指導要領（高等学校）	告示 論理国語、国語表現などの選択科目、新たな選択科目 理数科（理数探究）の設定、歴史総合（日本史・世界史の融合）と、選択科目 日本史探究・世界史探究の設定、総合的探究の時間の設定等					高1	高2	高3		
3ポリシー策定と認証評価	DP・CP・APの公表の義務付けを施行	H30～認証評価制度3巡目において、「3ポリシー」を共通評価項目とし、認証評価に反映								
入学定員厳格化	段階的に厳格化（大規模私学で2018 1.1倍以上で助成金不交付、国立大も規模に応じて授業料返納 等）			更なる厳格化（私学 2019～1倍を超える学生経費相当額を減額等）						

大学入試改革について

教育再生実行会議第四次提言

「高等学校教育と大学教育との接続・
大学入学者選抜の在り方について」

(平成25年10月31日)

大学入学者選抜は、高等学校教育を基盤として、各大学のアドミッションポリシーの下、能力・意欲・適性を見極め、大学での教育に円滑につなげていくことが必要。このため、大学入試のみを問題にするのではなく、**高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の在り方について、一体的な改革を行う必要**

多面的・総合的に評価・判定する大学入学者選抜への転換

大学入学者選抜は、各大学のアドミッションポリシーに基づき、能力・意欲・適性や活動歴を**多面的・総合的に評価・判定するものに転換**

達成度テスト（発展レベル）（仮称）の導入

国は、大学教育を受けるために必要な能力の判定のための**新たな試験を導入**。**外国語等の外部検定試験の活用を検討**

文部科学省における主な取組

◆中央教育審議会答申（平成26年12月）、高大接続システム改革会議最終報告（平成28年3月）等に沿って、大学入学者選抜の改革を推進

◆受験生の「学力の3要素」*について、**多面的・総合的に評価する入試に転換**

*：①知識・技能 ②思考力・判断力・表現力 ③主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度

●大学入学共通テスト実施方針（平成29年7月13日）

- 知識・技能を十分有しているかの評価も行いつつ、**思考力・判断力・表現力を中心に評価**
- 全受検者の中での当該受検者の成績を表す**段階別表示**の検討

- 「国語」、「数学I」、「数学I・数学A」については、マークシート式問題に加え、**記述式問題を出題**

- 英語の「読む」「聞く」「話す」「書く」の4技能を適切に評価するため、**共通テストの枠組みにおいて、現に民間事業者等により広く実施され、一定の評価が定着している資格・検定試験を活用**

マーク式問題の工夫・改善

科目別得点における9段階表示

記述式問題について指摘された主な課題

- ①質の高い採点者の確保
- ②正確な採点
- ③採点結果と自己採点の不一致 など

英語成績提供システムについて指摘された主な課題

- ①受験に係る地域的事業や経済的に困難な者への対応
- ②障害のある受験者への配慮
- ③異なる試験を活用することの公平性 など

文部科学省
の見直し

令和元年11月・12月 安心して受験できる配慮などの準備状況が十分ではないことから、共通テストにおける英語成績提供システム・記述式問題の**導入見送り**を発表

令和元年12月 「大学入試のあり方に関する検討会議」設置 → 英語4技能評価や記述式出題を含めた**大学入試のあり方について改めて検討**

- 入試と高校教育や大学教育との役割分担をどう考えていくか、どこまでを入試で問うべきか、また共通テストと各大学の個別入試との役割分担をどう考えるかなどについて、外部の有識者からのヒアリングも交えつつ検討

国立大学の二次試験における国語、小論文、総合問題に関する募集人員の概算

導入延期決定
時点までの資料

国立大学の二次試験において、国語、小論文、総合問題のいずれも課さない学部の募集人員は、全体の61.6%（49,487人/80,336人）

（学部単位の募集人員数の合計）

	募集人員	国語			小論文		総合問題		国語、小論文、 総合問題の いずれも 課さない
		必須	選択	課さない	課す	課さない	課す	課さない	
前期	64,787	15,803	4,757	44,227	3,949	60,838	1,149	63,638	39,470
		24.4%	7.3%	68.3%	6.1%	93.9%	1.8%	98.2%	60.9%
後期	15,549	50	258	15,241	4,203	11,346	1,041	14,508	10,017
		0.3%	1.7%	98.0%	27.0%	73.0%	6.7%	93.3%	64.4%
全体	80,336	15,853	5,015	59,468	8,152	72,184	2,190	78,146	49,487
		19.7%	6.2%	74.0%	10.1%	89.9%	2.7%	97.3%	61.6%

※下段は割合

注1) 「小論文」と「総合問題」について、選択科目となっている場合は、「小論文を課す」「総合問題を課す」として計上している。

注2) 総合問題とは、複数教科を総合して学力を判断する総合的な問題を指す。

※各大学が発行した「平成28年度入学選抜要項」を基に、文部科学省において作成 42

6 「高度な記述式」に関する国大協の方針

国大協の「高度な記述式試験の実施」に関する方針（案）

平成32年度以降の国立大学の入学者選抜制度 －国立大学協会の基本方針－（案）抜粋

（2）個別大学入学者選抜

① 「一般選抜」

各大学は個別入学者選抜において、それぞれのアドミッション・ポリシーに基づき、受験生一人一人の能力や経験を多面的・総合的に評価する入学者選抜に改革する必要がある。改革の実現に向けては、大多数の受験生を対象とする「一般選抜」の改善が大きな鍵となる。国立大学は、「一般選抜」において、「知識・技能」を基盤とした「思考力・判断力・表現力」、「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」の評価をより重視するため、次のとおり改善を図る。

i）高度な記述式試験の実施

国立大学としては、前述（1）. ③の観点から新テストの記述式問題を活用するとともに、各大学がそれぞれのアドミッション・ポリシーに基づき作題し、全ての受験生に個別試験で論理的思考力・判断力・表現力を評価する高度な記述式試験を課すこととする。ここでいう高度な記述式試験とは、例えば、複数の素材を編集・操作し、自らの考えを立論し、さらにその過程を表現する能力を評価できる問題であり、既に個別試験において記述式試験を実施している大学にあっても、そのような能力をより適切に評価するため作問の改善を図る。

教科・科目を含め、その具体的な内容・方法については、各大学・学部の主体的な判断に委ねられるが、各大学・学部が募集要項等において出題意図、求める能力等を明確にした上で受験生に課す。

なお、個別試験において、センターが提供する記述式問題の活用を希望する大学においては、その実施時期等を統一するなど、実施大学間で予め必要な調整を行う。

実際には個別学力試験でかなり書かせている

Ⅲ 19世紀半ば以降、東南アジア島しょ部ではイギリスやオランダによる植民地経営が本格化し、現地社会に大きな変容をもたらした。植民地体制下で社会生活が安定し、人口が増加した。貧富の格差は生じたものの、富裕層も成長した。次の表1・表2・グラフ1および資料1は、それらに関連したものである。それらを見て、下の問い(問1～問4)に答えなさい。

表1 作物 **A** の輸出量に関するデータ

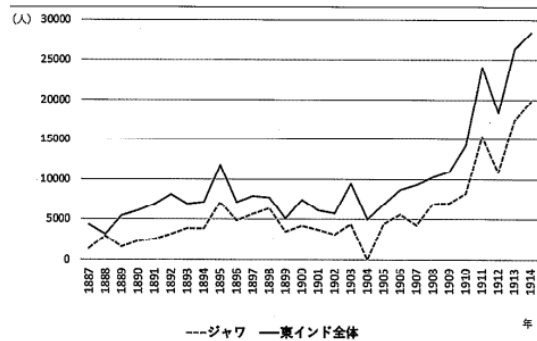
年	英領マレーの輸出量(t)	世界の総輸出量(t)	世界総輸出量に占める英領マレーの輸出量の比(%)
1910	6,500	94,000	6.9
1911	10,800	93,000	11.6
1912	20,300	112,100	18.1
1913	33,600	118,400	28.4
1914	47,000	121,700	38.6
1915	70,200	166,600	42.1
1916	96,000	210,100	45.7
1917	129,000	267,300	48.3
1918	112,000	221,400	50.6
1919	204,000	398,000	51.3
1920	181,000	353,600	51.2
1921	151,000	300,200	50.3
1922	214,000	399,700	53.5

表2 オランダ領東インドの主要産品の輸出額比率(%で表示、1880～1930年)

	1880年	1890年	1910年	1920年	1930年
ゴム	0.1	0.2	2.1	8.4	18.2
香辛料	3.6	4.5	4.1	0.9	4.8
コーヒー	42.7	15.3	3.6	2.7	3.8
コブラ	—	5.4	12.8	4.7	7.8
砂糖	34.9	38.3	42.3	53.5	26.1
タバコ	10.5	16.3	9.8	8.6	6.2
茶	1.3	2.2	3.5	2.0	7.4
石油・石油製品	—	2.4	11.4	15.8	19.5
スズ・スズ鉱石	6.8	15.5	10.3	3.3	6.2

※各年の合計は100%にならないことがある

グラフ1 オランダ領東インドからのメッカ巡礼者数



資料1 オランダ領東インドで発行された『ムニール』誌の創刊号の巻頭言(1911年)

タクワ(アッラーの戒めを完全に守り、神の禁止事項を行わないこと)とは、故郷に善行を伝えたり、子供たちを教え導いたりする助け合いの道にいて、祖国と民族から、この世と来世の後退を取り除き、知識や学習を愛する人々へそれぞれの心を奮い立たせる知識の書物を執筆することである。イスラム教の基本を知り、全ての神の命によって善行をおこなうことは、全ての善行の種であり、基礎である。また、エジプトやインドやトルコなどのイスラム大国ではすでに行われているように、日刊紙、週刊誌、月刊誌など、様々な新聞や雑誌を発行する上での助け合いや努力をすることは、善行の種や進歩の木がさらに増えて、民族と祖国の人々の宗教を強くする。(中略)

しかし、本当にそうであっても、我々の側にはまだ、我々の民族またはスマトラ島民族一般を指導し、イスラームの知識の道を進ませるための新聞も雑誌も存在しない。それゆえに、永遠に無知で、宗教の扉を閉じ(中略)、そしていつも人々を宗教から後退させ、自覚を失わせている。そしてついには全く宗教を失わせてしまうおそれがある。我々イスラム教徒にとって、宗教の後退と喪失以上に悪いことがあるだろうか。

問1 表1で扱われている作物 **A** は何か。①～④から選びなさい。

- ① コーヒー ② ゴム ③ 砂糖 ④ 茶

問2 表1・表2によると、19世紀末から20世紀初頭には、東南アジアからの輸出品の構成や世界市場における東南アジア産品の占める割合に大きな変化があったことが確認できる。その要因について、宗主国との関係や技術革新、人口移動をふまえて説明しなさい(120字程度)。

問3 グラフ1で確認できる現象はイギリス領マレーでも起きている。19世紀末から20世紀前半にかけて東南アジアのムスリム社会にこのような現象が見られた要因について、表1・表2で示されている経済的な変化や当時の世界的な交通環境をふまえて説明しなさい(120字程度)。

問4 20世紀に入ると、東南アジア島しょ部ではアラビア文字で書かれた新聞・雑誌が数多く出版され、国境を超えて広く流通した。資料1はそうした雑誌の一つである。こうした雑誌の流通量増加の背景について、資料1で記された内容やグラフ1で示された現象をふまえて説明しなさい(150字程度)。

中止になった2つの施策は何のためだったのか？



入試に英語 4 技能テスト「書く」「話す」発信力養成 安西祐一郎 元中央教育審議会会長

（前略）英語教育や入試に書く・話すを導入すべき明確な理由がある。それは**単に簡単な英会話ができるようになるためではない**。これからの時代には**自分の思考内容を明確にし、それを論旨明快に相手に伝える方法の一つとして、英語力を身につけることが肝要**だからである。高校や大学では英語は主体的に思考、判断、表現する方法の一つと考えるべきであり、書く・話す鍛錬が極めて重要になる。

（中略）端的に文章を書き、話す力の教育を根付かせるには、入試に論旨明確な短い文章を書く記述式問題を導入して高校教育を変えることが不可欠だ。**英語 4 技能テストは国語と数学の記述式問題導入と同じ目標を持つ。**

書く・話す、特に主体的な思考力、判断力、表現力に基づく論旨明確な発信力の養成は焦眉の急である。1990年代初頭からほぼ半減した18歳人口、世界の急激な多極化と日本の立ち位置の変化、その中での子供たちの教育の在り方、これらを総合して未来を直視すれば当然の帰結である。

II 進みつつある入試の変化

現状の入試動向をどうとらえるか？

国公立大の学校推薦型・総合型選抜の入学者数の推移



■**国公立大**では、後期日程を廃止し、代わりに総合・学推を実施する大学が左の通り増加。

2022年入試で総合型選抜、学校推薦型選抜を行う国公立大 ※ () 内は前年の数値。

[総合型選抜]

国立 64 大学 (63) ・ 258 学部 (250)

公立 38 大学 (36) ・ 77 学部 (74)

[学校推薦型選抜]

国立 77 大学 (76) ・ 283 学部 (279)

公立 93 大学 (91) ・ 203 学部 (199)

私立大の学校推薦型・総合型選抜の入学者数の推移



■**私立大**では、総合・学推の年内入試で定員をある程度確保し、年明けの一般入試の定員を絞って偏差値を見かけ上上げる動きが加速。

定員の厳格化、18歳人口の減少とともに、総合型・学校推薦型選抜で、年内に優秀な生徒を奪い合う動きが激化することが予想される。

11 様々な「多面的・総合的」入試の現状

パターン	大学名	入試名（あれば）	特徴
高大接続型講座を継続的に実施	追手門学院大	アサーティブ入試	アサーティブプログラムを1～3年に実施。アサーティブノートを継続使用
入試当日に、探求的学びや模擬授業・実験などを実施	京都工芸繊維大学	ダビンチ入試	1次・スクーリング、2次 面接レポート課題など
	お茶の水女子大	新フンボルト入試	文系：図書館入試 理系：実験室入試
探究評価型入試	桜美林大学	探究入試Spiral	探究の成果をプレゼンテーションする入試
	島根大学	へるん入試	高校で培った「学びのタネ」を評価。筆記試験を実施（読解・表現力テスト、クローズアップシート、志望理由書）調査書で探究活動を記入
難関国立大の総合型・学校推薦型選抜の現状	東京大学	推薦入試	100名程度、推薦は1学校当たり男女1名ずつ
	京都大学	特色入試	R4年度合計165名の定員を特色入試に（法学部後期20名は特色入試）
	大阪大学	総合型・学校推薦型	R4度合計360名（約11%）の定員を総合型・学校推薦型（242名入学）
	九州大学	総合型・学校推薦型	R4度合計288名（約11%）の総合型・学校推薦型
	東北大学	AO入試 II・III・特別入試	R4度合計657名（約28%）その他特別入試枠 若干名
	名古屋大学	推薦入試	R4度合計368名（約17%）

各大学の総合型選抜・学校推薦型選抜の出題内容（国公立大学）

大学名	学部・学科	入試方式	科目名等	文章記述量
埼玉大学	教育学部 (小学校コース国語教育に関心を持つ者)	学校推薦型選抜	小論文	800字以内
島根大学	人間科学部	総合型選抜 II	小論文	300字程度
北九州市立大学	経済学部	学校推薦型選抜（文系）	小論文	文章の要旨のまとめ 200～250字 自分の意見 400字以内
北九州市立大学	法学部	学校推薦型選抜（文系）	小論文	文章の要旨のまとめ 330字 自分の意見 500字以内

各大学の総合型選抜・学校推薦型選抜の出題内容（私立大学1）

大学名	学部・学科	入試方式	科目名等	文章記述量
北星学園大学	経済学部 経済法学科	総合型選抜事前課題	小論文 (事前提出)	600～800字
東北学院大学	文学部・経済学部・経営学部・法学部・教養学部	学校推薦型選抜・総合型選抜A日程第二次選抜	小論文	文章の要旨のまとめ100字 自分の意見 700字以内
帝京大学	経済学部(経済・地域経済・経営・観光経営学科)・法学部・文学部・教育学部	総合型選抜	小論文	文章の要旨のまとめ100字 自分の意見 400字以内
摂南大学	法学部	総合型選抜 AO入試	小論文	1500字以内
摂南大学	理工学部 建築学科	総合型選抜 AO入試	実技 (描画)	デザイン画を作成し、その意図を 200字程度で説明

各大学の総合型選抜・学校推薦型選抜の出題内容（私立大学2）

大学名	学部・学科	入試方式	科目名等	出題内容（概要）
甲南大学	文学部	公募制推薦入学試験(教科科目型)	小論文	文章の要旨のまとめ200字 自分の意見 300字以内
広島修道大学	人間環境学部	総合型選抜	レポート方式	3000字以内のレポートを作成 また、試験当日にレポートに関する教員からの質疑に答える
福岡工業大学	社会環境学部	専願制推薦・併願制推薦	小論文	図の内容を300字で説明 自分の意見200字以内

【国語】解答させる内容（問題の例）と資質・能力、出題形式との関係について（たたき台）

別紙3①

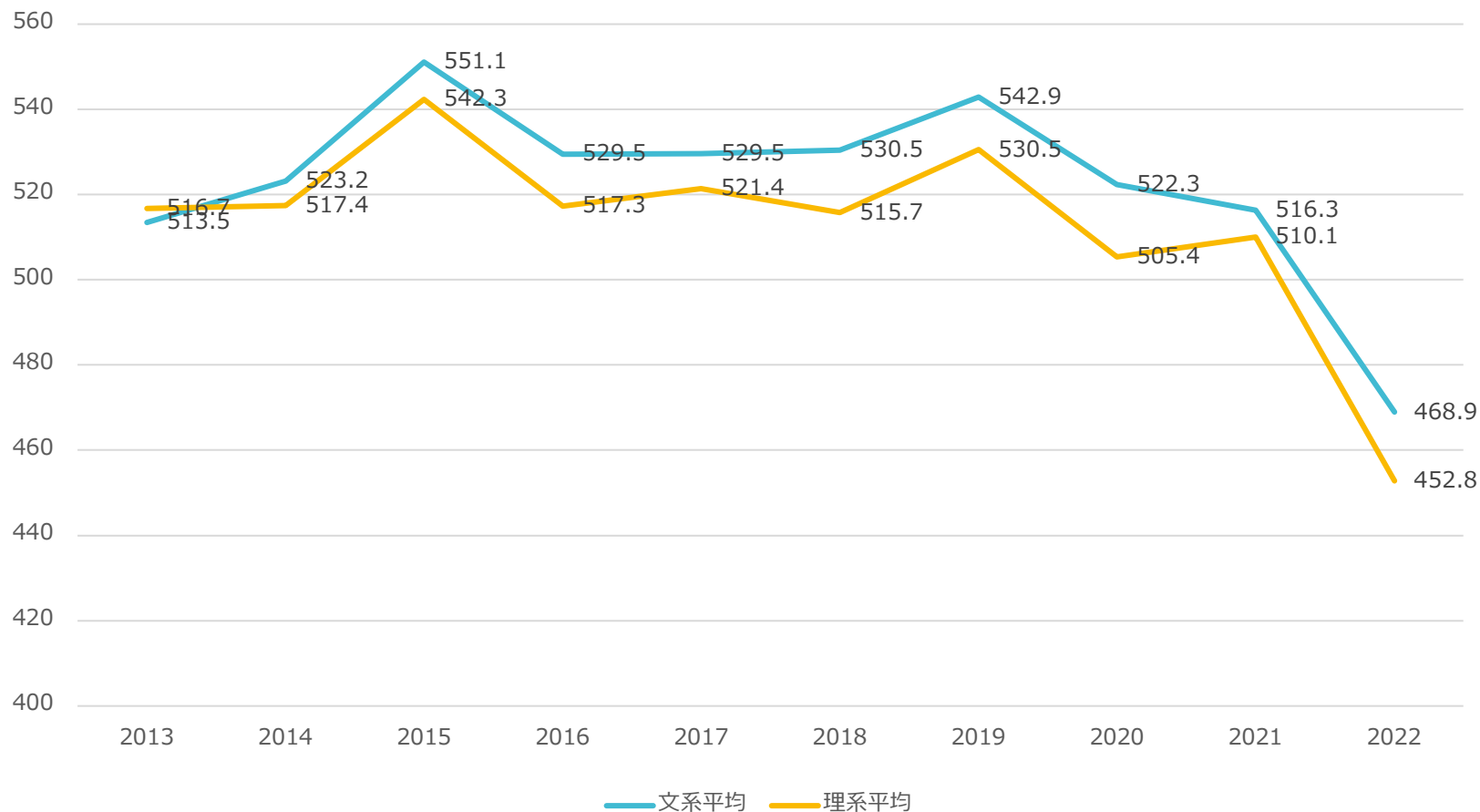
	構造と内容の把握	精査・解釈	考えの形成・深化
知識・技能 (略)		【創造的・論理的思考の側面】 > 情報を多角的・多面的に精査し構造化する力 ・推論及び既有知識による内容の補足・精緻化 ・論理（情報と情報の関係性：共通－相違、原因－結果、具体－抽象等）の吟味・構築 ・妥当性、信頼性等の吟味 > 構成・表現形式を評価する力 【感性・情緒の側面】 > 言葉によって感じたり想像したりする力、感情や想像を言葉にする力 > 構成・表現形式を評価する力 【他者とのコミュニケーションの側面】 > 言葉を通じて伝え合う力 ・相手との関係や目的、場面、文脈、状況等の理解 ・自分の意思や主張の伝達 ・相手の心の動きや感情の読み取り > 構図	考えの形成・深化（情報の編集・操作） > 考えを形成し深める力 ・情報を編集・操作する力 考えの形成・深化（知識・経験との統合） > 考えを形成し深める力 ・新しい情報を、既持っている知識や経験、感情に統合し構造化する力 ・新しい問いや仮説を立てるなど、既持っている考えの構造化を転換する力
（記述式の場合） テキストの内容（筆者の考えなど） を説明する問題	①テキストの部分の把握・理解 ※テキストの部分的内容を把握・理解して解答する問題 ①選択式・短答式	構造や内容の把握して、テキストに挿入すべき語句を答える 構造や内容の把握して、テキストの内容を答える テキストの中における、比喩表現の示す内容を答える テキストの中における、抽象的表現や難しい表現の意味内容を答える	
	②テキストの全体の把握・理解 ※テキストの全体的な精査・解釈によって解答する問題 ②選択式・条件付記述式		
（記述式の場合） 考えを文章化する問題	③情報の編集・操作 ※テキストの全体的な精査・解釈によって得られた情報を編集・操作して解答する問題 (テキストの内容を基に考えを文章化する問題) ③選択式・条件付記述式	テキスト全体の構造を把握し、目的のために必要な情報を追加、統合して比較したり、関連づけたりして論じる 複数のテキストの妥当性を吟味し、情報を統合・構造化して論じる	考えの形成・深化（情報の編集・操作） > 考えを形成し深める力 ・情報を編集・操作する力 考えの形成・深化（知識・経験との統合） > 考えを形成し深める力 ・新しい情報を、既持っている知識や経験、感情に統合し構造化する力 ・新しい問いや仮説を立てるなど、既持っている考えの構造化を転換する力
	④自分の考えとの統合 ※テキストの全体的な精査・解釈を踏まえ、自分の考えと統合・構造化して解答する問題 ④自由記述式・小論文	テキストにおける筆者の主張を踏まえつつ、自分の考えを形成して論じる テキストに示された図表等の情報を分析した上で、仮説を立てて、自分の考えを論じる テキストの論旨を踏まえて、既有知識・経験を具体的に挙げながら、自分の考えを論じる テキストを踏まえて、テキストと自分自身との関わりについて考えたり、想像したりして、自分の考えを形成して論じる	考えの形成・深化（情報の編集・操作） > 考えを形成し深める力 ・情報を編集・操作する力 考えの形成・深化（知識・経験との統合） > 考えを形成し深める力 ・新しい情報を、既持っている知識や経験、感情に統合し構造化する力 ・新しい問いや仮説を立てるなど、既持っている考えの構造化を転換する力
		テキスト全体の構造を把握し、目的のために必要な情報を追加、統合して比較したり、関連づけたりして論じる 複数のテキストの妥当性を吟味し、情報を統合・構造化して論じる	考えの形成・深化（情報の編集・操作） > 考えを形成し深める力 ・情報を編集・操作する力 考えの形成・深化（知識・経験との統合） > 考えを形成し深める力 ・新しい情報を、既持っている知識や経験、感情に統合し構造化する力 ・新しい問いや仮説を立てるなど、既持っている考えの構造化を転換する力
		テキストにおける筆者の主張を踏まえつつ、自分の考えを形成して論じる テキストに示された図表等の情報を分析した上で、仮説を立てて、自分の考えを論じる テキストの論旨を踏まえて、既有知識・経験を具体的に挙げながら、自分の考えを論じる テキストを踏まえて、テキストと自分自身との関わりについて考えたり、想像したりして、自分の考えを形成して論じる	考えの形成・深化（情報の編集・操作） > 考えを形成し深める力 ・情報を編集・操作する力 考えの形成・深化（知識・経験との統合） > 考えを形成し深める力 ・新しい情報を、既持っている知識や経験、感情に統合し構造化する力 ・新しい問いや仮説を立てるなど、既持っている考えの構造化を転換する力

- ・ テキストにおける筆者の主張を踏まえつつ、自分の考えを形成して論じる。
- ・ テキストに示された図表等の情報を分析した上で、仮説を立てて、自分の考えを論じる
- ・ テキストの論旨を踏まえて、既有知識・経験を具体的に挙げながら、自分の考えを論じる
- ・ テキストを踏まえて、テキストと自分自身のかかわりについて考えたり、想像したりして、自分の考えを形成して論じる

高度な記述式に求められる測定すべき資質・能力

※解答させる内容と資質・能力、出題形式との関係は、代表的な例を挙げているものであり、問い方や場面等によっては別の出題形式等で問う可能性もあり得る。

センター試験/共通テスト推計平均点



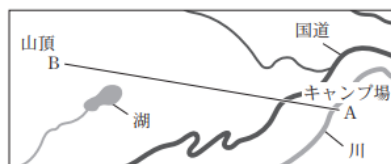
文系＝国語、数I/A、IIB、英語（200）、地歴の平均、公民の平均、理科基礎平均×2科目

理系＝国語、数学I・A、II・B、英語（200点換算）、物理・化学・生物の平均×2、日本史・世界史・地理B、倫理・政経の平均

数学Ⅰ・数学A

〔2〕 以下の問題を解答するにあたっては、必要に応じて41ページの三角比の表を用いてもよい。

太郎さんと花子さんは、キャンプ場のガイドブックにある地図を見ながら、後のように話している。



参考図

太郎：キャンプ場の地点Aから山頂Bを見上げる角度はどれくらいかな。

花子：地図アプリを使って、地点Aと山頂Bを含む断面図を調べたら、図1のようになったよ。点Cは、山頂Bから地点Aを通る水平面に下ろした垂線とその水平面との交点のことだよ。

太郎：図1の角度 θ は、AC、BCの長さを定規で測って、三角比の表を用いて調べたら 16° だったよ。

花子：本当に 16° なの？ 図1の鉛直方向の縮尺と水平方向の縮尺は等しいのかな？

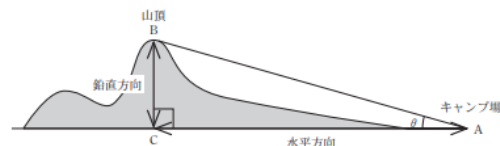


図 1

(数学Ⅰ・数学A第1問は次ページに続く。)

数学Ⅰ・数学A

図1の θ はちょうど 16° であったとする。しかし、図1の縮尺は、水平方向が $\frac{1}{100000}$ であるのに対して、鉛直方向は $\frac{1}{25000}$ であった。

実際にキャンプ場の地点Aから山頂Bを見上げる角である $\angle BAC$ を考えると、 $\tan \angle BAC$ は ・ となる。したがって、 $\angle BAC$ の大きさは 。ただし、目の高さは無視して考えるものとする。

の解答群

- ① 3° より大きく 4° より小さい
- ② ちょうど 4° である
- ③ 4° より大きく 5° より小さい
- ④ ちょうど 16° である
- ⑤ 48° より大きく 49° より小さい
- ⑥ ちょうど 49° である
- ⑦ 49° より大きく 50° より小さい
- ⑧ 63° より大きく 64° より小さい
- ⑨ ちょうど 64° である
- ⑩ 64° より大きく 65° より小さい

(数学Ⅰ・数学A第1問は41ページに続く。)

数学Ⅰ・A 1 出題教科・科目の問題作成の方針

○ **数学的な問題解決の過程を重視**する。事象の数量等に着目して数学的な問題を見いだすこと、構想・見通しを立てること、目的に応じて数・式、図、表、グラフなどを活用し、一定の手順に従って数学的に処理すること、及び解決過程を振り返り、得られた結果を意味付けたり、活用したりすることなどを求める。

また、問題の作成に当たっては、日常の事象や、数学のよさを実感できる題材、教科書等では扱われていない数学の定理等を既知の知識等を活用しながら導くことのできるような題材等を含めて検討する。

18 令和7年度以降の共通テスト国語・数学の時間増

- (1) 国 語：現在測定している内容を維持した上で多様な文章を提示する観点から、90 分とする。
- (2) 数学②：出題範囲が「数学Ⅱ」、「数学B」及び「数学C」となり、選択解答する項目数が2から3へ増加するため、70 分とする。

- (3) 情 報：出題範囲や他教科の試験時間等を考慮し、60 分とする。

以上を踏まえ、各教科・科目の試験時間は次のとおりとする。

教 科	グループ	出 題 科 目	試験時間
国 語		『国語』	90 分
地理歴史		『地理総合、地理探究』、『歴史総合、日本史探究』、『歴史総合、世界史探究』、『地理総合、歴史総合、公共』	1科目選択 60 分 2科目選択 130 分 (うち解答時間 120 分)
公 民		『公共、倫理』、『公共、政治・経済』、『地理総合、歴史総合、公共』(再掲)	
数 学	①	『数学Ⅰ、数学A』、『数学Ⅰ』	70 分
	②	『数学Ⅱ、数学B、数学C』	70 分
理 科		『物理基礎、化学基礎、生物基礎、地学基礎』 『物理』、『化学』、『生物』、『地学』	1科目選択 60 分 2科目選択 130 分 (うち解答時間 120 分)
外 国 語		『英語』、『ドイツ語』、『フランス語』、『中国語』、『韓国語』 ※『英語』については、ICプレーヤーを使用する試験も実施。	80 分 【ICプレーヤーを使用する試験】 60 分 (うち解答時間 30 分)
情 報		『情報Ⅰ』	60 分

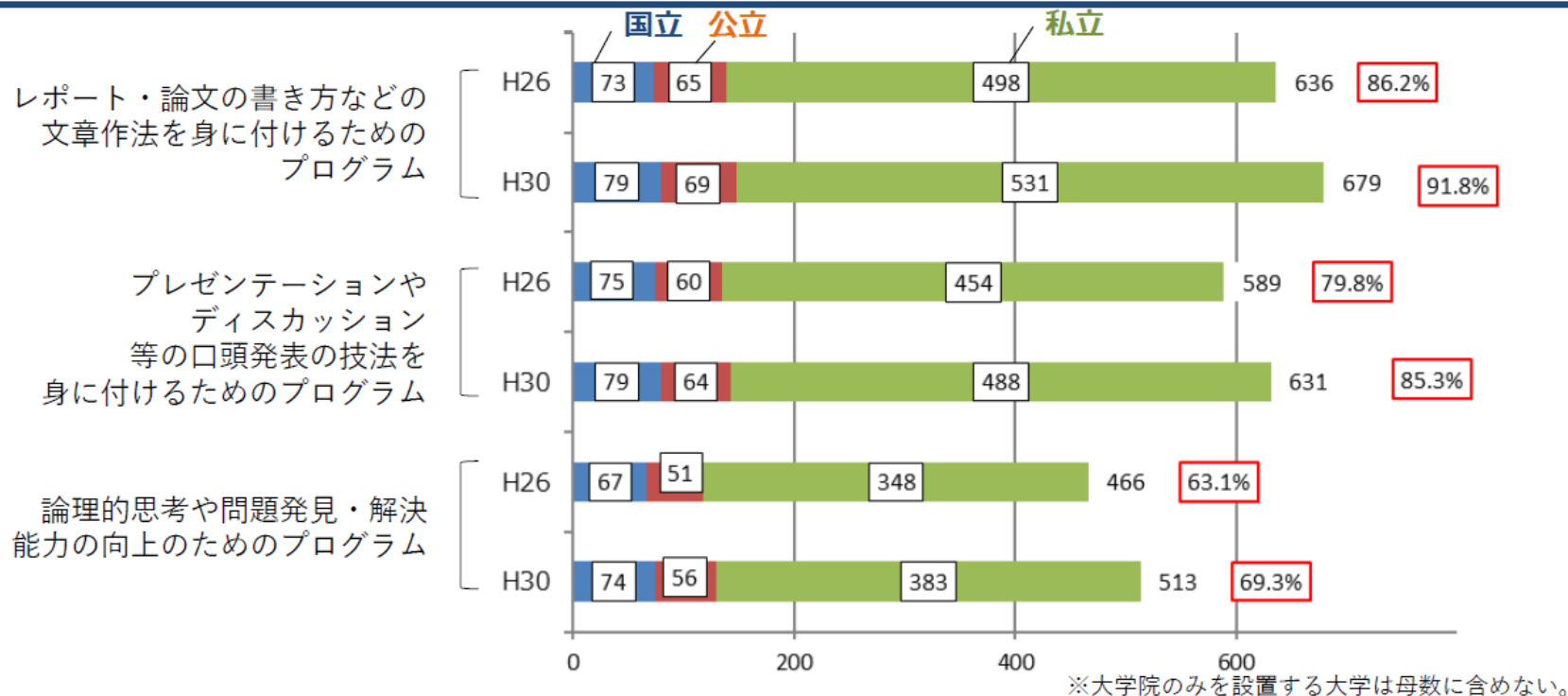
III 大学における高大接続の課題

大学はどのような課題認識を持っているか？

初年次教育の実施状況等

初年次教育を実施する大学は、平成30年度においては、721大学（約97％）であり、初年次教育の具体的な内容は以下のとおり。

※721大学のうち、全学部で実施している大学は629大学（約85％）



また、全学的な履修指導又は学習支援制度等の取組としてライティング・センター等、日本語表現力を高めるためのセンター等の設置をしている大学は平成30年度においては、90大学（国立：22大学 公立：3大学 私立：65大学）（約11.8％）である。

【出典】「平成30年度の大学における教育内容等の改革状況」（令和2（2020）年10月文部科学省高等教育局大学振興課大学改革推進室）

（※）調査対象：国公立782大学（短期大学、平成30年度に学生の募集を停止した大学を除く。）

回答率：97％（761大学が回答。うち、学部段階の母数は国立86大学、公立85大学、私立590大学の計740大学）

21 大阪大学（多分他大学や企業も）が欲しい人材①

本当に欲しい人材は「研究力」の素地がある生徒

「研究力」とは・・・

- ① 自分で研究のテーマを見つける
- ② テーマに関する「仮説」を創り出すことができる
- ③ 仮説が正しい事をどうすれば証明できるかを考える
（論証や調査・実験計画）
- ④ 行った結果を、他者に効果的に説明できる



この力は、ペーパーテストの学力と必ずしも相関しない



1. 研究には「問い」がある

研究とは、「なぜ・・・なのか」「●●はどうなっているか」など、明確な問いを立て、それを解決することを目指す活動

2. 研究には主張（問いに対する自ら編み出した答え、仮説）がある

研究の成果には「問い」に対するなんらかの答えがなくてはならない。それは、成功した事例に限らない。たとえ、〇〇の方法を行って失敗した、という成果であっても、新しい知識として歓迎されるべきである。

3. 研究には、主張を裏付ける論証・論拠がある

研究した者の主張、問いに対する答えには、それを聞く聞き手を納得させるための論証、裏付けが必要である。論証とは、自分の答えを論理的に支持する証拠を、効果的に配列したもののことである。

論証の根拠は、人文系では資料や文献、社会科学系では調査、自然科学系では実験などがよく使用される

23 仮説を立てる、研究する、なんて高校生には無理？



実際に、「研究」しなくても構わない。

このプロセスを実際に体験し、**自分の言葉で表現**できる事が大切

Korthagen (2005) のALACTモデルを参考に作成

参考文献：一般社団法人 学び続ける教育者のための協会編『リフレクション入門』,学文社,2019
訳・具体例は山下が修正・追加

24 大阪大学（多分他大学や企業も）が欲しい人材②

実験なんて、100回に1回成功したら良い方
立ち直る力・粘り強さが必要



様々な多様な人
との協働が必要



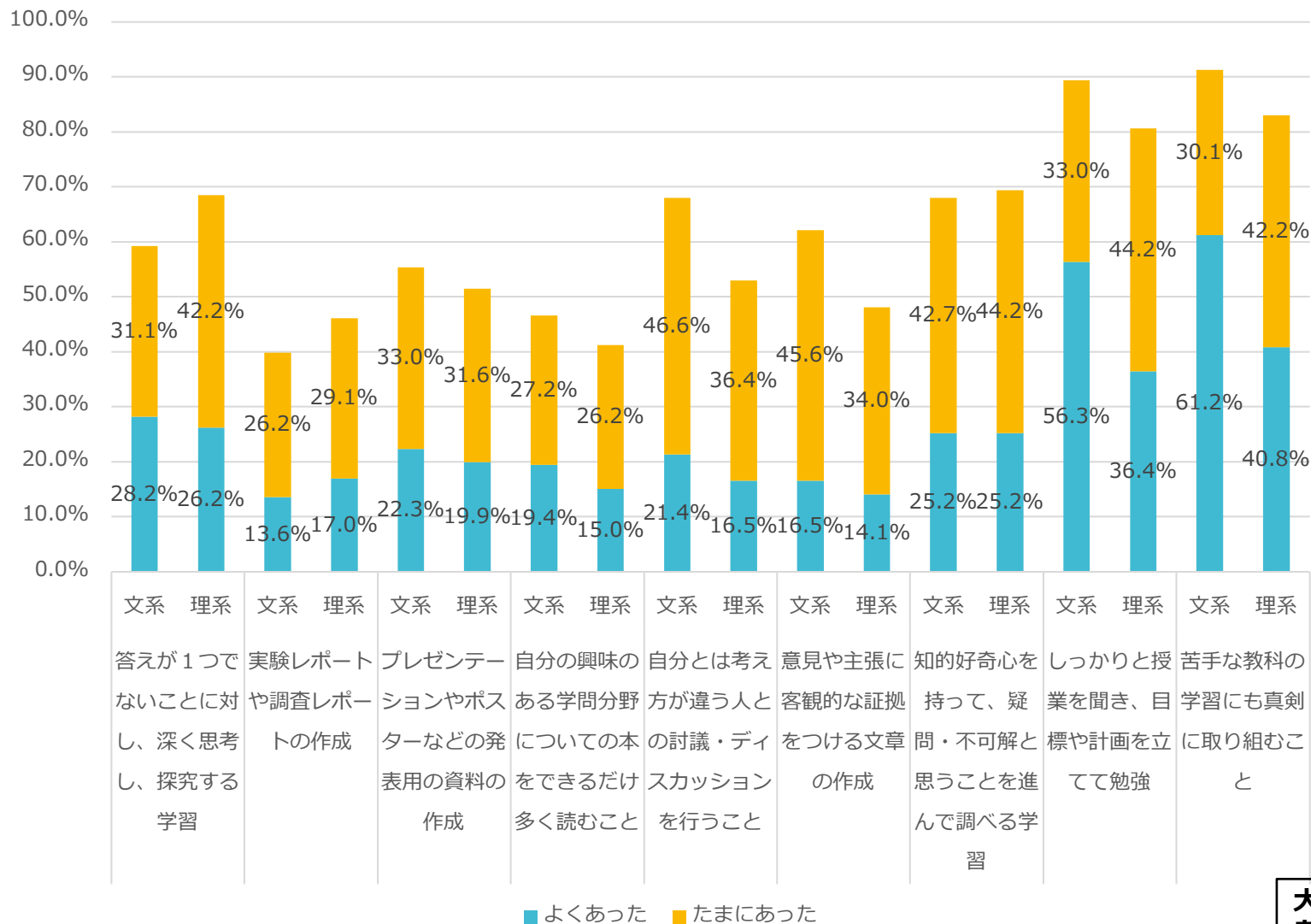
知的好奇心と

メタ認知能力が必要



レジリエンス（回復力）
コミュニケーション能力
知的的好奇心
メタ認知能力

AO・推薦追跡調査 高校時代の学びの経験

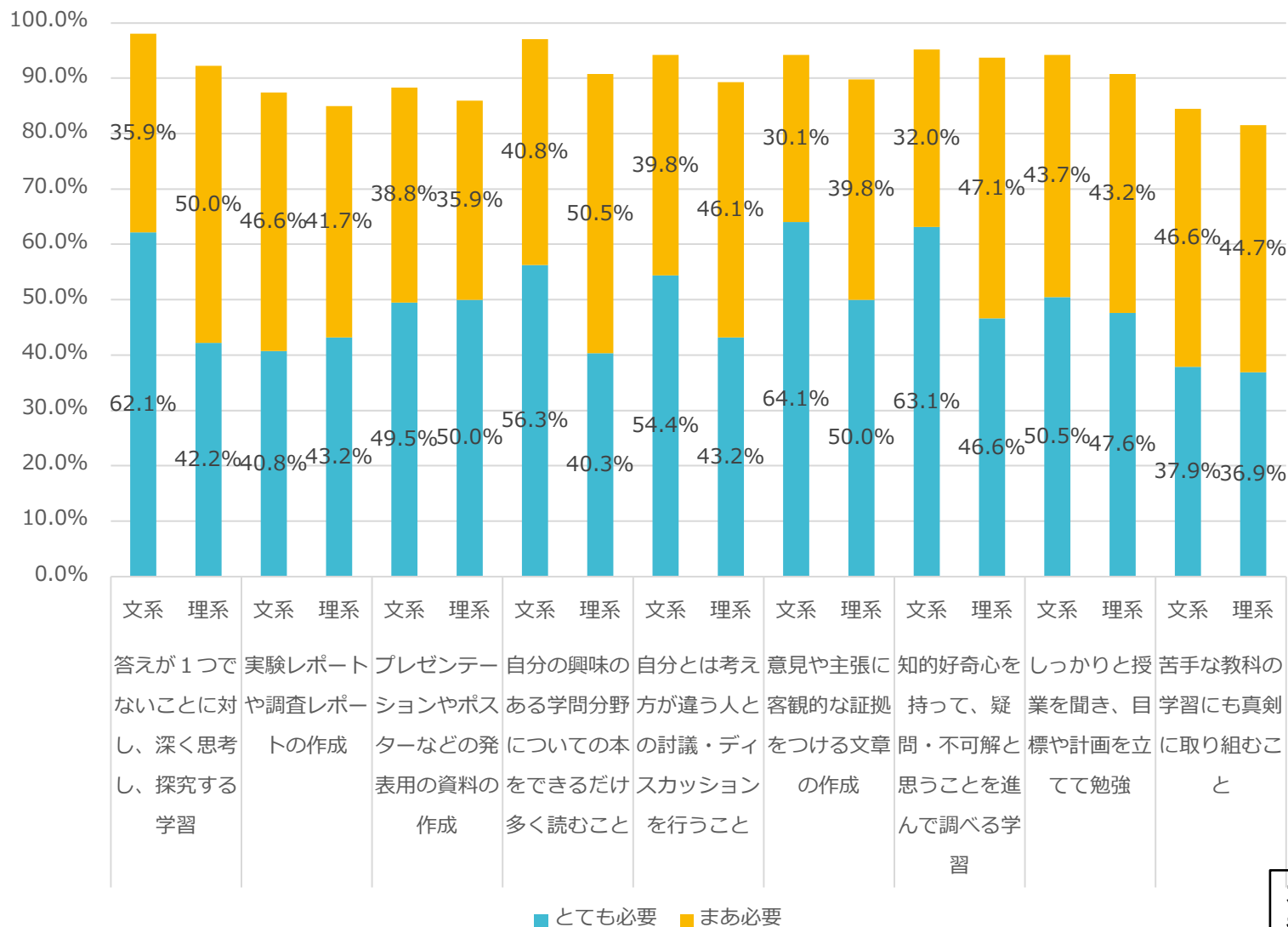


2018年度入学者のAO・推薦追跡調査の結果を総合。
文系 n=103
理系 n=206

4件法の評価の平均値の比較。
4 = よくあった～
1 = 全くなかった
の3と4を表示

AO・推薦入学者が約1/3、残りは一般入試合格者をランダムに抽出。母数にやや偏りがあるが、探究的学びの経験は60～70%となっている。ただし、「よくあった」のみであれば3割程度である。

高校時代のどのような学びが大学での学びに必要なだと思うか？



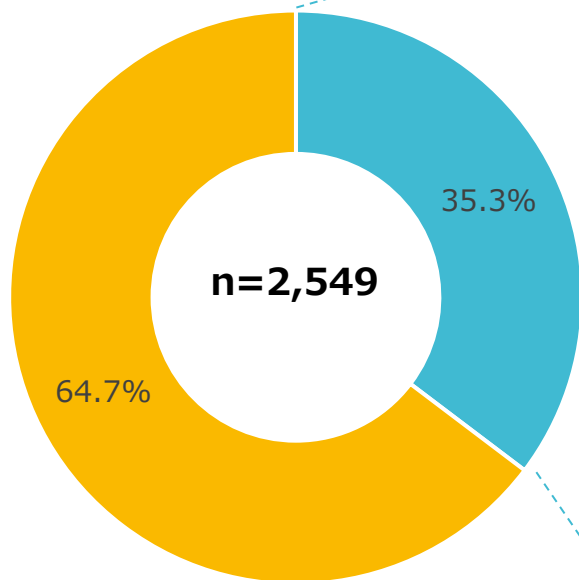
4件法の評価の平均値の比較。
4 = とても必要である
~ 1 = 全く必要でない
3と4を表示

高校時代に経験をしていなくても、高校時代にしておくことが重要だと思うことを回答してもらったもの。

3 + 4では概ね80~90%を超えるが、特に**探究的学び、意見や主張に証拠をつける文章の書き方、知的好奇心を持って進んで調べる**ことが重要と回答している者が多い。

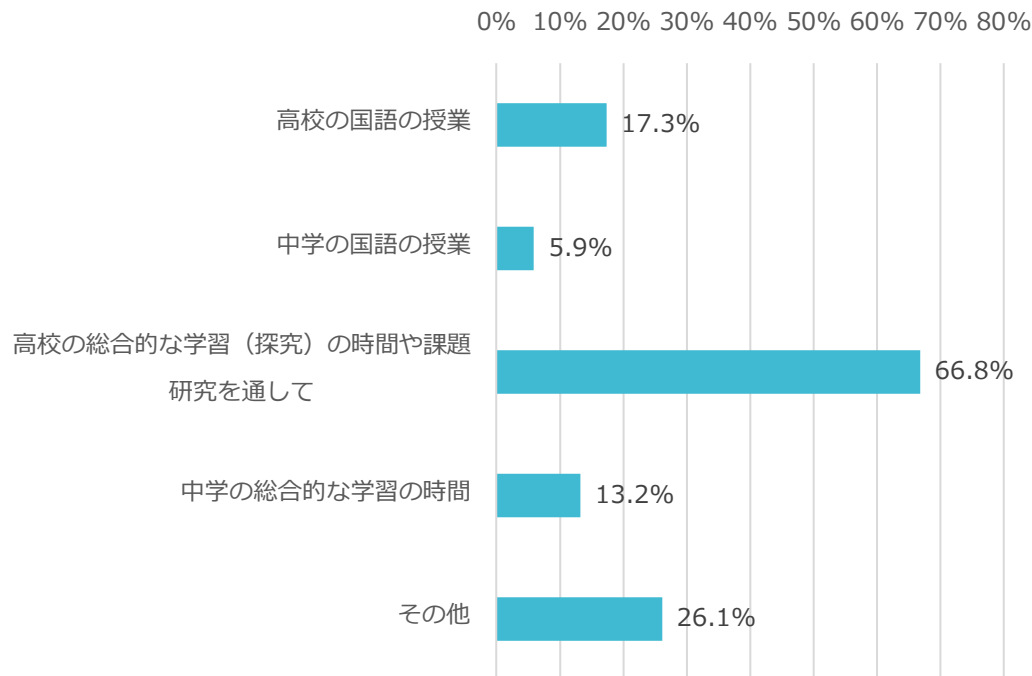
27 大阪大学の新入生は「文章を書く」経験をしてきているか

あなたは、これまでに2000字程度(A4で2ページ)以上の文章(レポートなど)を作成したことはありますか。



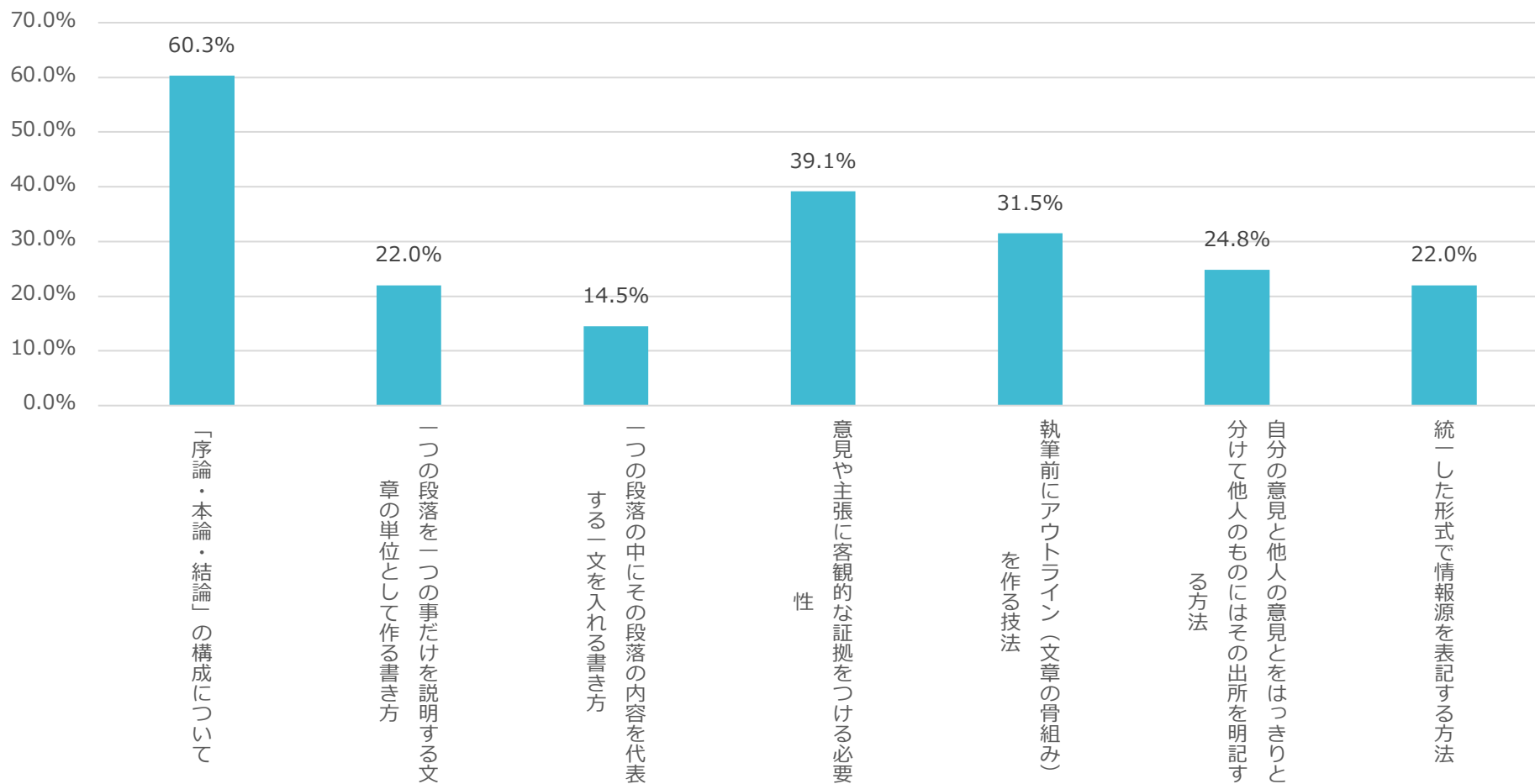
■ ある ■ ない

「ある」中、どのような機会に文章を書いたか（複数回答）



28 大阪大学の新入生の経験している文章の書き方（構成面）

R4 入学生の経験している文章の書き方（n=2,902）



29 大阪大学の全学共通初年次ゼミ「学問への扉」

新入生約3,400人を対象に1クラス最大17名までの少人数ゼミを実施（約250クラス。入学直後の春学期の必修科目）

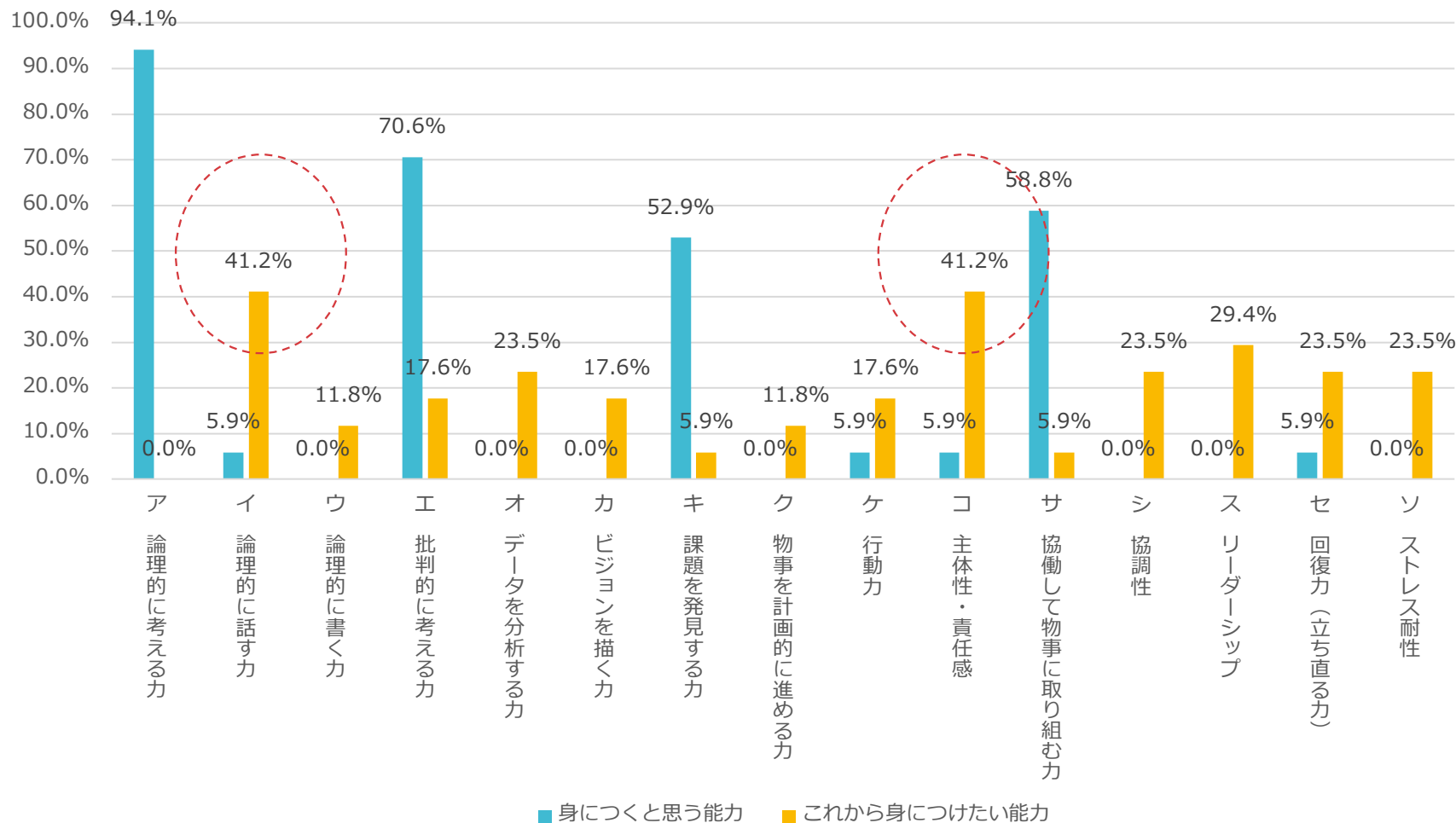
- 文系・理系を問わず学部学生をシャッフル
- 高校まで学んできた事の「学びほぐし」を目的
- 大学で学ぶこと、研究することの基本的態度やコミュニケーション力、プレゼンテーション力といった汎用的能力を育てる
- 理系が文系の、文系が理系のといった専門以外の研究に触れることで、自分の専門を見直し視野を広げる



実際の山下の授業「学問への扉 社会に役立つ研究力を身につける」の様子
サントリーの人事担当者の方に課題を出してもらい、PBLで提案をプレゼンする。

2019年4月10日撮影

大阪大学 学問への扉 2019 山下の講座 受講アンケート (n=17)



アンケート内容：これまでの「学問への扉」を受講して、身につく（身についた）と思った能力、これから身につけたい能力を3つずつ選んでください。

入学直後に、学部混合で少人数のPBLを行う。
互いの知識背景や環境、思考や嗜好、人格が未知の状態で、グループでの共同作業を行う



どんなにいいアイデアでも、論理的に、根拠のある形で発信（話す・書く）して理解・共感されなければ、相手を説得できない。自分の考えを受け入れてもらえなければ、良い案も実現できない。

＝初めての「異文化コミュニケーション体験」

32 まとめ：高大が連携して生徒を伸ばす必要性はこれからも続く

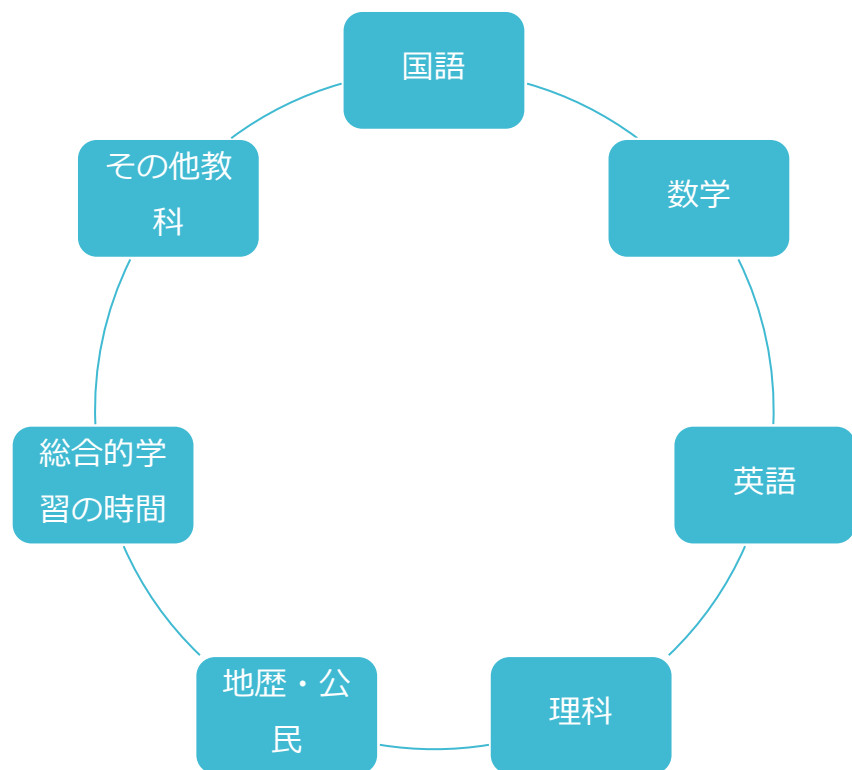
1. **高大接続改革の趣旨・目的は消えておらず、今後も共通テスト、個別学力試験、総合型・学校推薦型選抜などで**
 - ・書かれているテキストを俯瞰的、分析的、批判的に読む読解力
 - ・テキスト、図表、資料などを読み解く読解力
 - ・文章・会話などから条件を抽出整理し、式に当てはめモデル化をして問題を解く力
 - ・自分の考えを論理的に文章で表現する能力
 - ・自分の考えを論理的に、口頭で説明する能力がますます求められるようになる
2. **大学でも、入学者に求めている能力は同様のこと。**その理由は
 - ・今後社会に求められる人材要件は「研究力」（課題発見力、課題解決力…）
 - ・初年次教育で行っているのは論理的文章力の養成
 - ・学生もその必要性を自覚している

ただし・・・全ての事を、「国語」の先生だけが担うことは不可能。

今後は、

- ・本来の「国語」に加え、論理的・批判的読解、論理的表現能力を国語科で
 - ・各教科で、図表読み取りや、課題解決、数学的モデル化などを担う
- 明確な意図を持ったフォーメーションを取ることが必要なのでは？

これまで



これから

